[illegible]

二十二

歌を名とせり

EV.372

PL788
.4
.G4
1654
vol.37
Asian
Japan
Case

THE LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

42

源氏四十九戈表より秋までのるまで葉二戈　柏ノ事

右橋大納言のたりあるくうきぬひにしかるしさ給
あらず口おしきもれに、意志のひぬふ人おほかり。
六条院にも、大(ん)かたにつけてぞ、よるめやすき人の
あるくあるをばおしこ給れこころに、ましてこれも
朝夕にしたしく来りあれつて、人よりもれこころ
とどめおぼしたりしかば、いかにぞやおぼし出
ことはありあるべし。おもれはおほくおりくにつけて
恵びぬふ。柏ノ一周忌之れにしてにも、補注(ぞきやう)などとりつきをきを給
よろづもしらずがれに、葉ノいたけあるきれ有様をこぬふ
にも、さすがにいたじくあれなれば、れ心のうちに
まる心ざしぬて、葉ノんざしんも、こがの百夜をるんべちにをさせ

給けり。おとゞいころもしてぞ。してまりよろこび
罪しさをなふ。大将の恵も。ことゞもおほくしなふ。
とりもちて念比にいとなき給。此一条の家（藤茶）をも。この
ほどの此心（タノ）ざしかくとゝひ罪し給。（柏ノ）そこらの恵遊
よりも。まさりしろ此心の程をいとかくいせひ罪しざりき
とおとゞうへ（宮恵）もよろこび罪し給。（柏ノ）おまさ給りしを。世の
恵しをもくもれしまひけるほどにこゝろり。
いらじうわたしたうのこ。おぼしこがるゝことつき
をず。山のこ（朱ム）かどい二（藤茶）のこやもかくひとつしたれ
なるやうまて。なぐめなふなり。入道の家（六三）も此世の人
かしきこゝにかけもなれなひぬれど。さ雨ぐり

あらずおぼえられど、すべてこの世をおぼしなや
まじと思ひ給ふ。此（女三ノ）をとなひの程にもおなじこゝろ紙
にそいふとめぬふしめなどおぼしやすてゝ、かゝ
る海になりまひて後いとうきことにつけても
こゝぞ罪ふ給ふ。此寺（仁和寺）のうちもしらさもやしに。
ゆきいでゝろ毎うなか。そのまうりの山にはれつゝろ
などの山里につけていおもれなれば、なれぬふとて
此ふこゝ海やうなうもしに。去（文ノ行）の空山霞も毎ぐ
こゝしれど、こゝろざしふくはりしさきて給ふ。
しうしぐうりになん
世（未）をまうれへなんたいをくうともおなじ。所紙

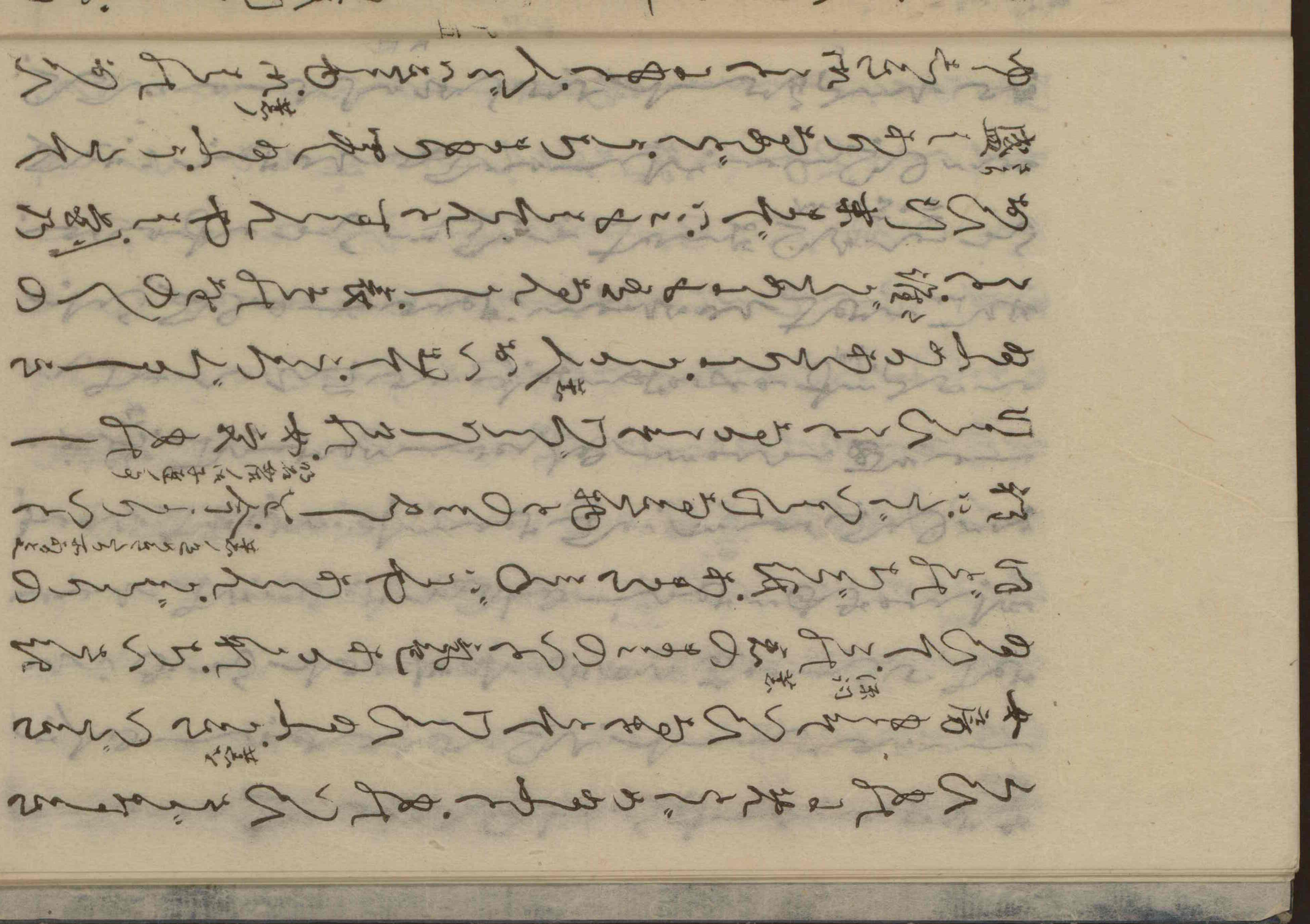
志もたづ○よいとうたきわざにあんあるとこそ
のへるを洞(女三ノ)ぐらて給ほどに(源)おとゞのきこしたり
のへりれいあるぞれまへちうきらいしどもをお(詞)
ぞあやしとれ(源ノ)んずるに院(朱)のれふこなりなり
こゝまへいとあれなりれ(女詞)ふかあすかれこゝち
すかを對面のうちよかれもぬことなどこまやうに
うせのへりこれ(源ん)おなじところのれともなひを
ことにおしきつしもあきひぞりごとになれど
げるさぞおぼすんかし。けれさへなろか(ち)女さ海に
こしなりて。いとゞうもろめたきれもひのそしふべあ
かをいとくかしとおぼす(女三ノ)れ返(みり)けしましげり

出なひて、れいりひまは、おほまびのあや一うきね
なふ、うきうへなへりけりうへの、れ事のそぞより
ほのゝゆりを、さりてこゝまへぞ、れまへいともう
なげまて

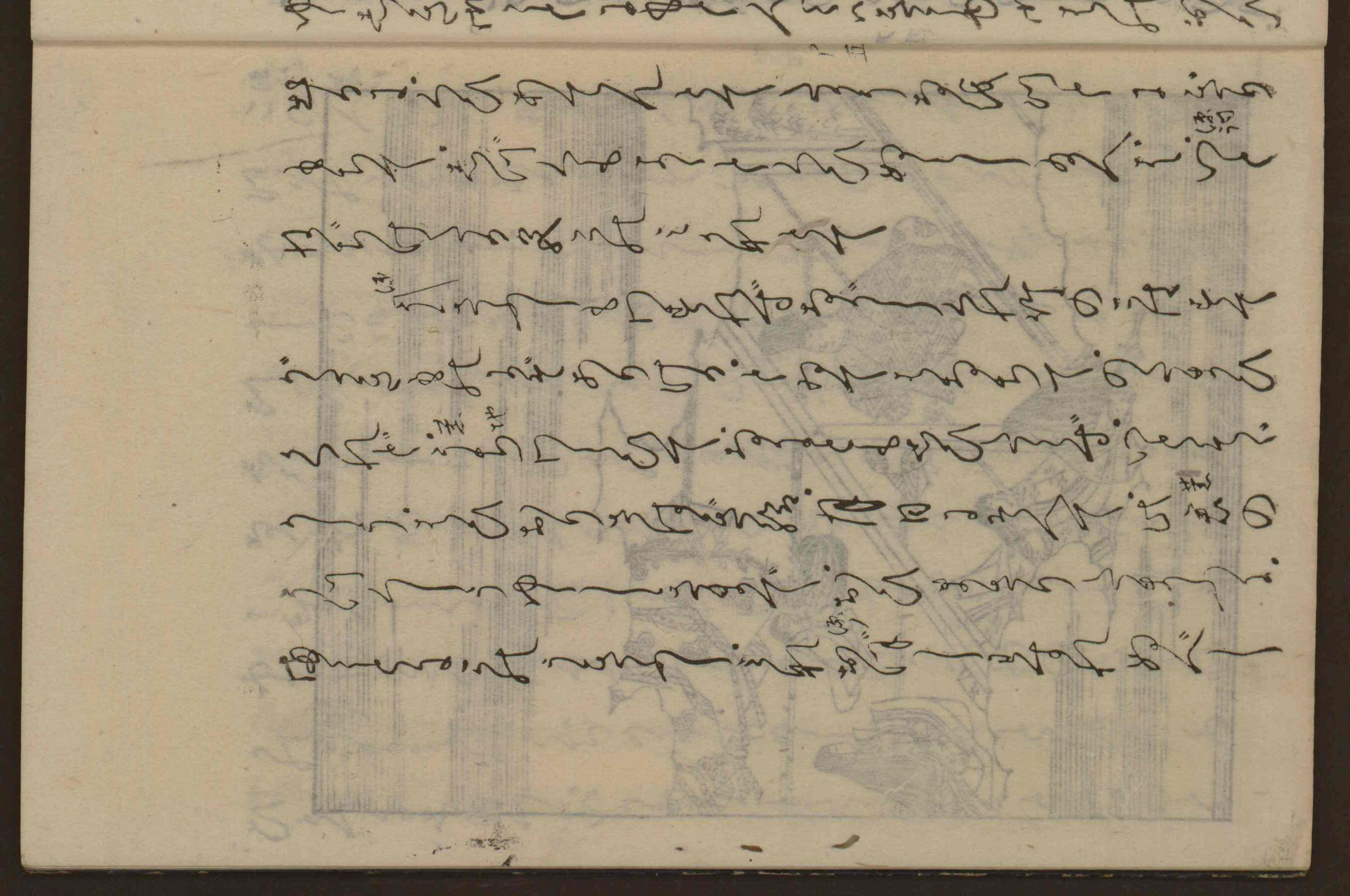
女三 うきせまはあらぬさゝろのゆしくてそむく
山路(ぢ)まさひこそいれ、うしろめたげなりれなしき
なりまこ(深河)のあらぬ所もとめなへるいとうこそころ
うしと笑なふ、今(女三ノ)はまほまとしまりこ海ハず、
いとうれしうらうらげたりれひたいぐこつら
つきれおしさ、ゆぐちごのやうりこえなて、
いうじうらうこきを、こ(深ノ)まりなふまつけてハ、など

きりは女ゆゑにこそとゞこほりぬべくおぼされども
れ未だちり侍てまゐりつかまつりけれどもくうき
うきしうはおしぬ程なれてなしこそしてぞおもひ
けり。いなばめれらせ許はねてまへてけり。たゞこそ
ちひ出なのて。れ袖どひきまいられ出る給ふ侮にと
うかうしきさうす色にはまいりのこころんの紅梅乃
れぞのすそ、いとなかくさげなげるひきやられて。
れ身をいとおしいまでうきころの恨をきなし
まへうさ侮はれいのこゝちなれどいとらうらうげる
ちかくたびやかな。柳をたつりて川うるとさうらん
やうなり。うしろしく露草ましてかことさらになる

ぞりさんゆちして、うちつきうつくしうまほひ
まこのびらうる。ちづしうかほりたるなどは、なほ
いとよくさひ出たるれど、かけもいとゝやうす。
きはこなれたるさまにはなりしものなれ、いとで
うらん。（女三）やまもまなしず。今よりけさくまれく
しう。さ面ことなこしのへるさしさまどは、（源）我れ、
ぞこのげりも。よげなりしずこなされたまふ。
まづなあ面こなどしのほどなるも。これたうう
なれらいしに、何ともしらず立よりて、いとあいた
しうとりちらして、うひかなぐりなどしのへど
（源詞）あならうがりしや。いとゝかびんなり。かれさりくを。



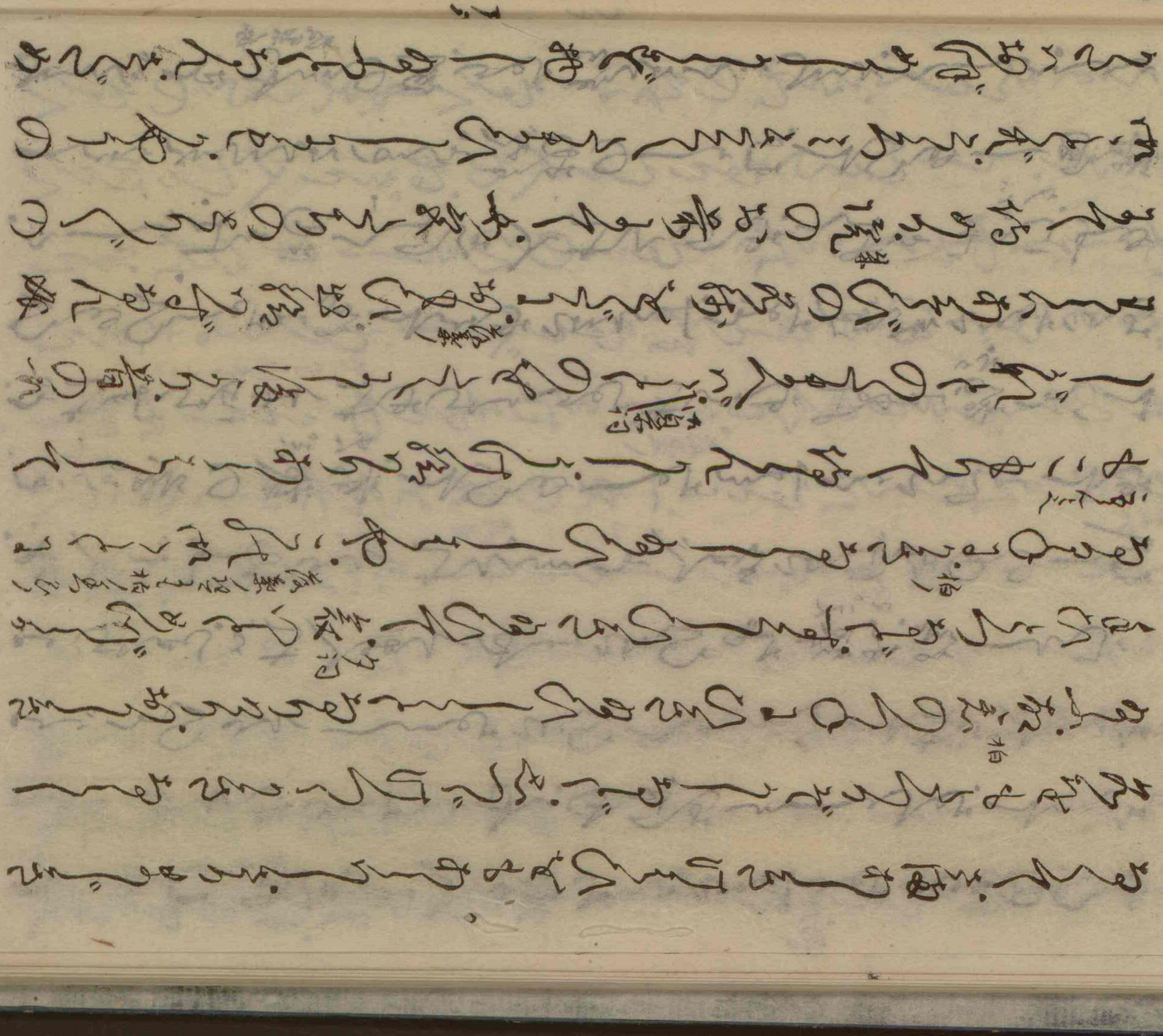
うひもれは先とじめぬふと。もれいひさぶすき
女房もとそいひなきとてワひぬふ。うきいぐき
なひて。これ（源河）恵（蓋）のまこのいと気色あるうれ。ちいさ紀
はどれちぐ紙。おまるこ〇ばまやあらん。うぐらりの
程はこぐいたけなき抱とのこゝろしを。今（蓋ノ色めきたる所あると）よりいと
けたひことなるこそワづらりしれ。女（明石女房ノ法子達ノ事）宮もれし
なふめるあらりま。うる人（蓋）おいしてこゝろぐるしき
こと。誰（さ）ぐらあまもなんし。衰それをのくの
おひり末までいこもちてんとすらんやも。蓋乃
盛（さら）しありなめどくうちまもり罪ぬふうそて
ゆしきれことまもと。人ぐいきも。れ（蓋ノ）もれ何ひ

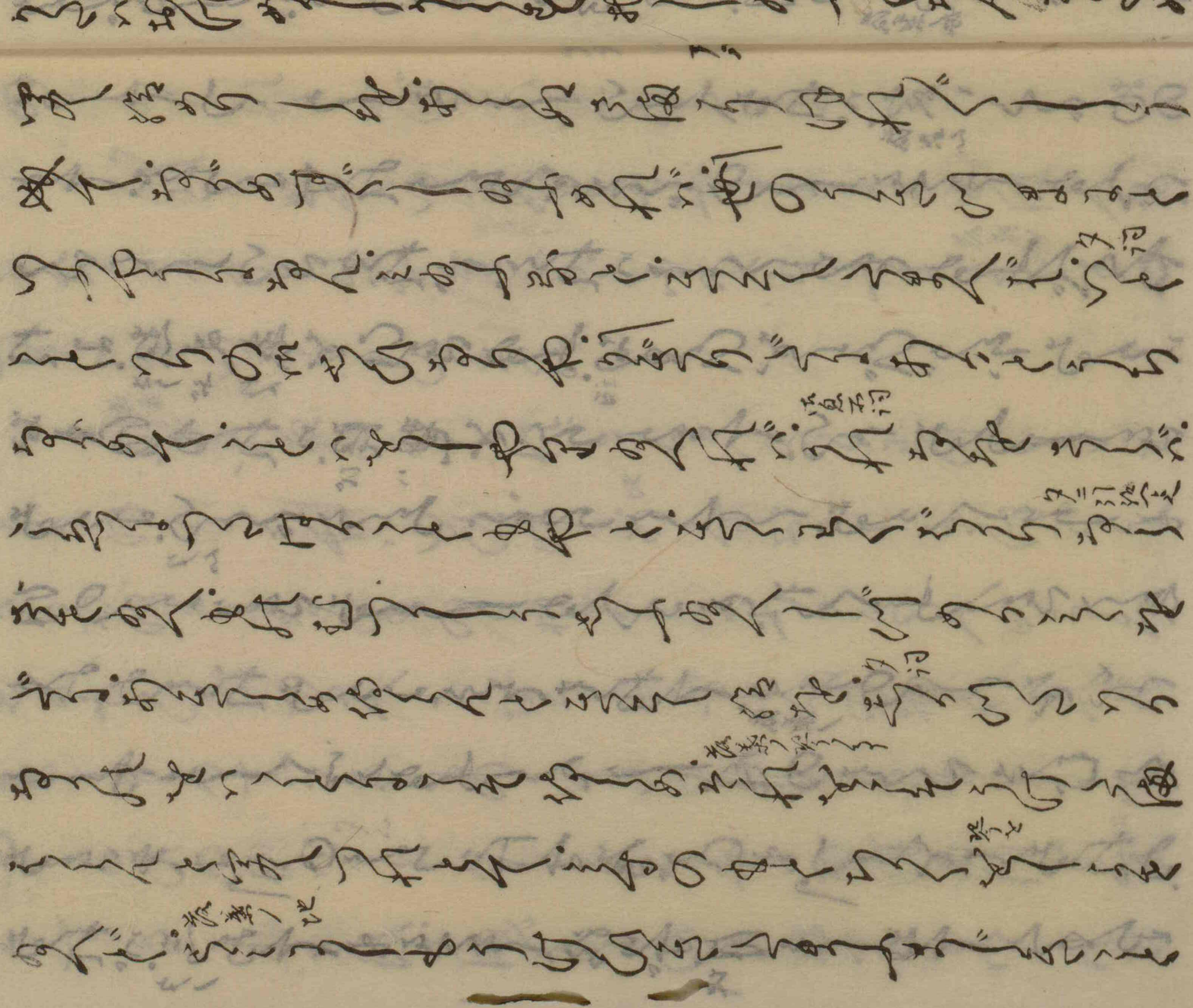


この人(源ム)のいで抱しのべきちぎりまて。さらせひの
ほかれこともあるまこそハありけめ。のがれがるゝな
ゝまざぞりしと。すらしハおぼしなをさらこゝぐ
うらのれすくをもなほあるぬことおほうり。おまえ
ひどへこまへる中にも。此こや(女三)こそハかゝるほなする
せひまじらず。ひとれれまほもせつまあぬさらる
なくて抱しのべきほ。うくせしざりしさ夜にて
こまりことおぼすまつけてなん。色にしけこ
ゆかしがらく。れくちおしかりけり。大ね(タム)のきこは。
かれいまれ(柏ノ)とぢめまとぐめしひとこと紙。こゝろ
ひとつませきつゝいりなりしことぞとは。いと

罪まほしう（源ノ）はしきも床しきは。ほの心えて。
しひよしうしこともあれば。中々うち出て聞えんも。
うるはしいさうて。いりちまんつゐでに。此ことの
うけしきありき海もあきしめ。又れ人の聞ひ入
うりしき海をも。きうしめさんとしつゝり給。（地）船の
（生べ）夕のもれあきれなりに。一（タム）条の家（夜条）をしやうもきうて
おひてけうりおへり。うち（夜条ノ）とけしめやかりは琴（ことゝ）
どもなどひきおふ程なるべし。ふくも（おこなど引きしうかへ）えとり
やうでやがてそれこゝなのひきしにいれなり
おへり。こしつゝるなりつゝ人のねざり入つゝけひ
どもしるく。きぬのをとなひも。大うるのなひ

かゝりしくさゝろくさ行なり。例のこ（夜業毎）やましござる
對面しけるのでむかしの拙絵どもさゝえかくし
かふけ（タイ）ぐれとみく。おけくるれ人もげく、拙さはがしく。
ゆきちかき見送ちすゞ。すゞさきおもて語まちましひのひ
ていらく静（おつ）よまれおそれちり。うちおれかゝ心ちすれど。
おそまけるゝすゑちすしかひて。前栽（せんざい）の花だらに
むしのねもげきゝすべくどゝくれかゝゆふぐれに
うらし語。和琴（わごん）をひきうせまへれがつちらま
もてべられていづとくひきゝるしかゝ。ひとがま
もつてなつしう拙げ句、やうみすわまり。
ぞひのまくちうすさゞろおる人へ。しもげむすろゝと





のこあまれとおぼしつゞけうるに

タ
こゝに出ていふぬもいふまきうとは人に
まぢうかしきをぞこうと思ひまつに 茂葉ノ ぐす思
つるをいさくひさ給

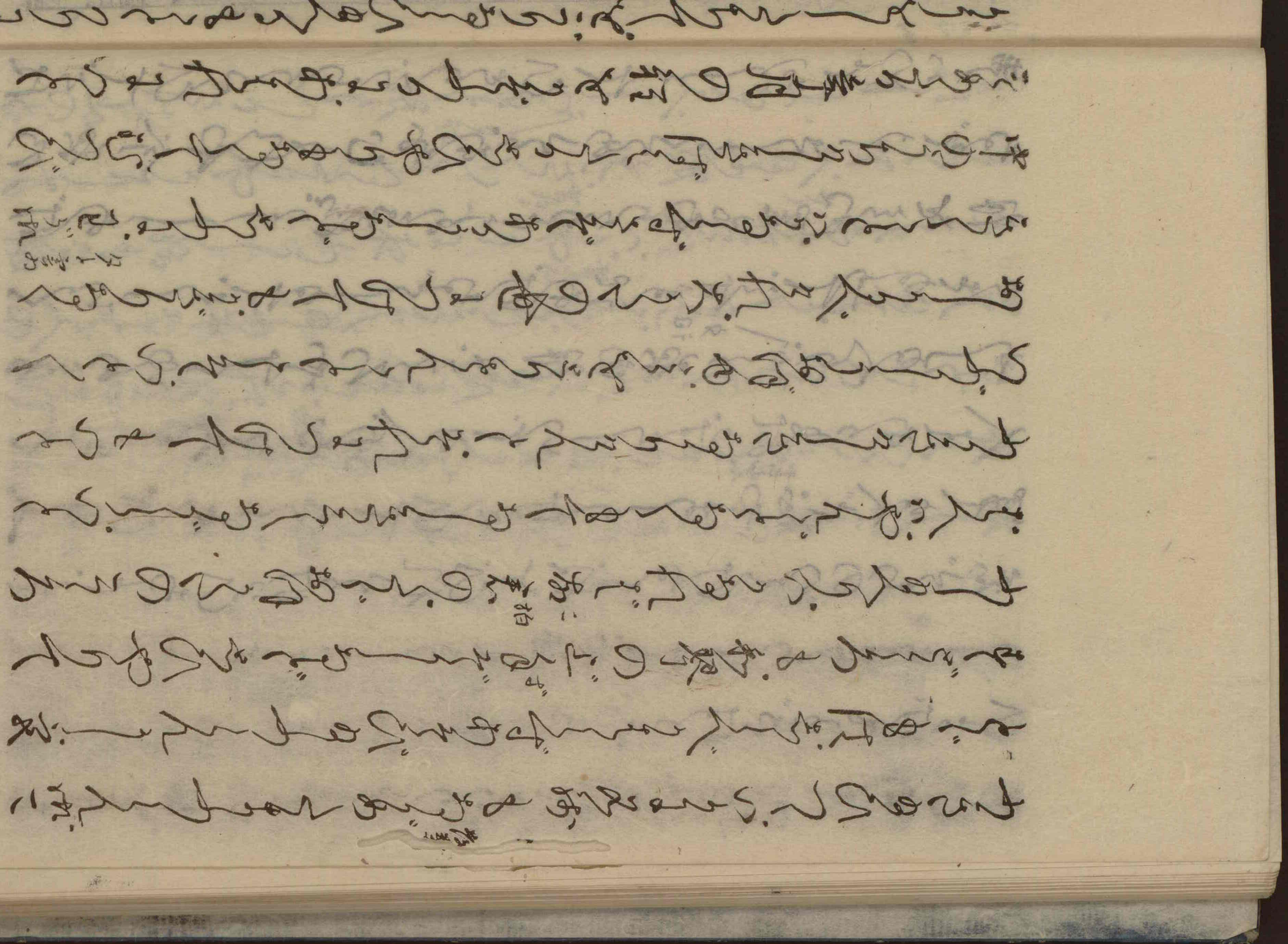
茂葉
ゆうさ夜のあれだりはきくまけどくゝ
ようほうにやいひけり 比 おぼおしきほどに
さうおほとうちうものくねがしに ゆうさ人のうろ
しめてひさつゝへうおちじしんべの地といへど
衣にうろすぐさものゝかゝりしをうさちうして
やこのひぬれば タム うしめしきまうで おぼゆれど 河 す
さずさしさ紙さ面ぐにひさ出てもゆんを

られぬりれ。秋の夜ふし侍らんも。笠うし志
柏ノ
とがめやとけぢうりてちん。まうで侍ぬべう先御。
まることきこゝる心してあんさふしふべき法。この
小こと式のしらべかへず。まくせこ夜きんや。ひき
夜がふ家ことも侍ぬべきよあれば。うしろめたくこそ
あるべ。まほまほあしるどうちまほをし垂て出給。
比
こゝひのれすきまほ。人ゆるしきそし所べくあん
ありけり。そこもうとなきいふしへがたりのこ
まざしいさをぬて。武のをまきん心ちもし侍しぬ。
御りおほくあんとて。れ（御息石ノ）をとり物ま笛をそへてまれ
給是（同）まあんまくとまふるきこともつるきうるべく。

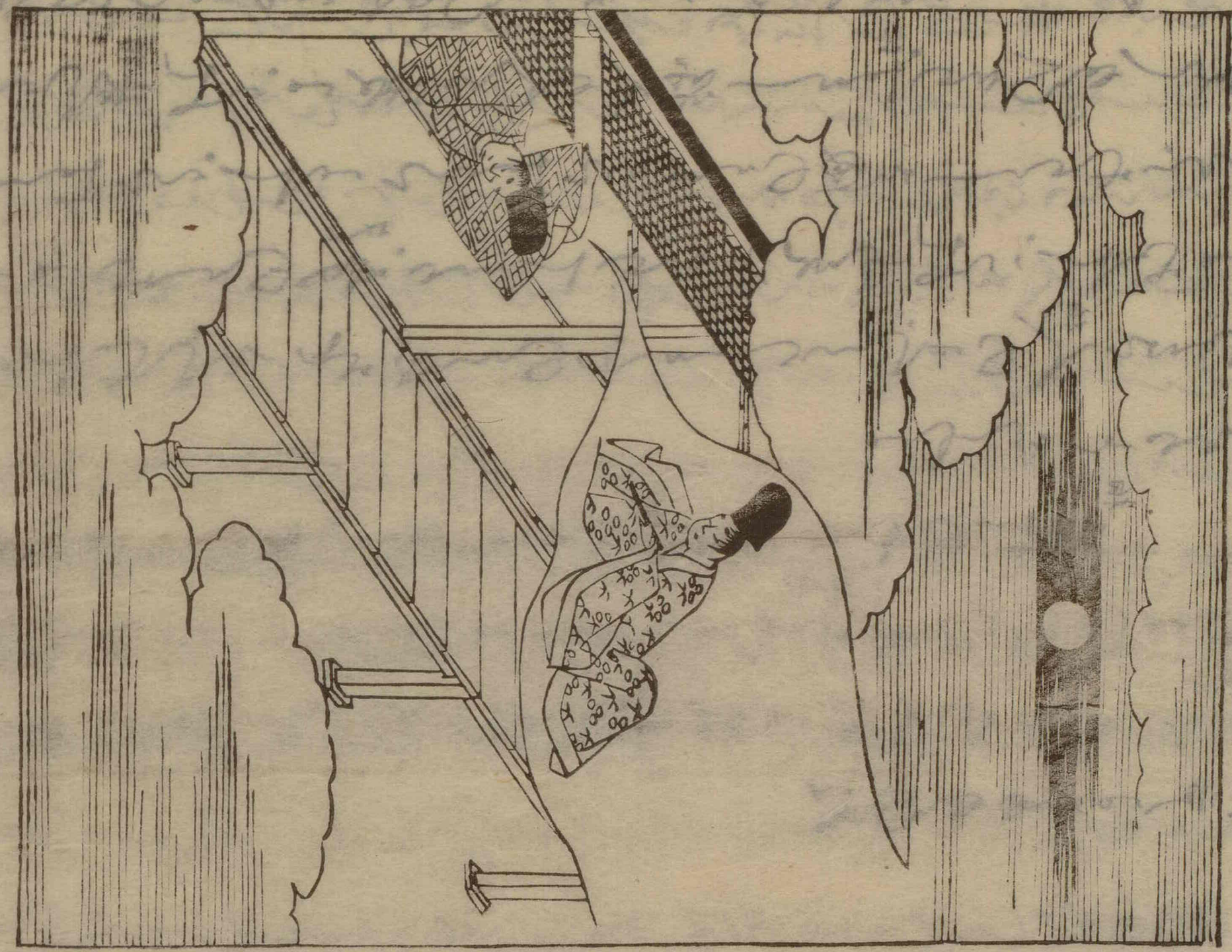
始是はなんまことはふるさともつるべく。
ずをさ侍りしを。かし子よりもさふようげもなくも
あもれはこゝぬふるを。此さ記はきをもんこゝ思なん。
よそなずしもいぶかしく侍りとさそしさまへむ。
夕詞 まけかもしかしぬ 侍(ざ)が 身はそ侍べかれとて。こ
ぬふはこれもげまことゝもは 柏ノ 身はそへてもそ
あそびつゝこげかしもさしはこれがねのかざりは
えふさとをさず。ちもんひとはいぞつゝへてし
がなとおりしきそしごちぬひしをちひ出給は。
今すこしあもれおほくそひて心こはふさなしす。
むんしき調(だう)のなしぶりふささしてむかしを
志のぶ独(ひとり)ごとは。さてもつゝゆるされ侍りしられも

まばゆくなんとて出給ふ
家（以見不）をしげきむぐらのやどにいましへの秋に
かはらぬ虫のこゑかれどきこえいぐしうまへり
よ（タ）こ笛のしらべはとまりぬをむなしく
成しねこそつきをまいでがてにやすらひ給ふ
夜もいたく更にかり（タリ）雁にかへりぬへれむかうし
おどおろさせてこれねぬひにかりこれ（比）家（落葉）に心（タリ）がけ
罪しなてかくねんどろがりきこえしぬふぞおとゝへの
きこえしきこせかれば（言ねん）かやうに夜ふかし給もな雨
まてて（タリ）へぬふ紙も（言カノ）きこくねたるやうりて
かけしぬふなるべしいもと（タ詞）紙といりされ山のと

声ハいとおしうてひとりごちうらひて。こは
なぞうくさしうらめたる。おなむもれや今夜乃
月をこゝぬ星もありなりとうめき給ひうしあげ
さをぬしてこすまゝ紀あげなどしなておしちく
かしぬへりかゝる夕詞夜のほにこころやすくゆめこる
人もあるもれかすうしいでぬへおなこころうなど
罪しぬへど心やましうけさひてさくまびぬふ。
云ぬん
君ぶちのいまけなくねをびれたるけひなど。そ
りしこまうちして。女房もさしこゝこてふしたる。
ひとげもまざけしきこまおりつるさろのあさ夜
夕ん
落葉
せひあもするまおほくかりたりこの笛をうち



かりそめなからてどうりあるひまへるまこゝろは
春のひゞきすし孫入まゐる夏ま。これ詠うたこゝ。
うたあらしき夜のうちさすがにてうつゝけし
よみて。これみえをとりてかう。夢のうちまも
あまさ人のまつうつ。このこゝゑをうつれてさ
うつとせつめ。
笛竹のかなうる風のこゝちすばかり束のこゝぬすゞき
ねうつへあん。さふうこゝさ待りこしつる。
とうあんとさふ程ま。おもびの玉をびれておまきなる
此声まさめのひぬ



タノ中子 ゆ
この君いくゝなきなりて、つゝこゝなどしなへば、
めれともおきさはぎ、よ(雲ゐ)へもおほとなるぶら
ちゝさりよせさせなひて、こしもさゝ志て
そくゝりつゝろひて、いぐさてなるまゝ事を、
いとよくこえて、づぶくとおしげなるむねを
あけて、ちなどくゝめ給、ちぐもいとうけくうおい
すり志なれば、志ろくおしげなるに、れちもいと
うもしかなりを、心をやりてなぐさめ給、とゝこ君も
よりおりて、いかなるぞなどのなふうちまさし
ちしなどして、こぐりがもしさり、ゆめのあ
られもまぎれぬべし、なやましげにこそこゝ面れ

いまめりしされ（後葉ノ字）ま種のほどにあくがれこまふて
夜ふりされ月めでたりかうしもあげられ
これがれいのもれくけのへたるなりなどいと
けくおりしさうかしてかうちぬへば打（夕）まくひて
（詞）おやしのもれくけのしるべやまろうしあげずは
こちなくてげまえいりこぎしまし。なまこの人の
おやに成ぬふまくに。思いたりふくもれをこそ
のこまひなりにこれとてうちこやまぬへるまこの
いとまづしげなれば（書カ）さすがにもれものこ後もで
いで（詞）ぬひ（夕）こぐるしとてあまくしなる時かげを
さすがにまちぬへるさ後もまくかくず（比）まくとに

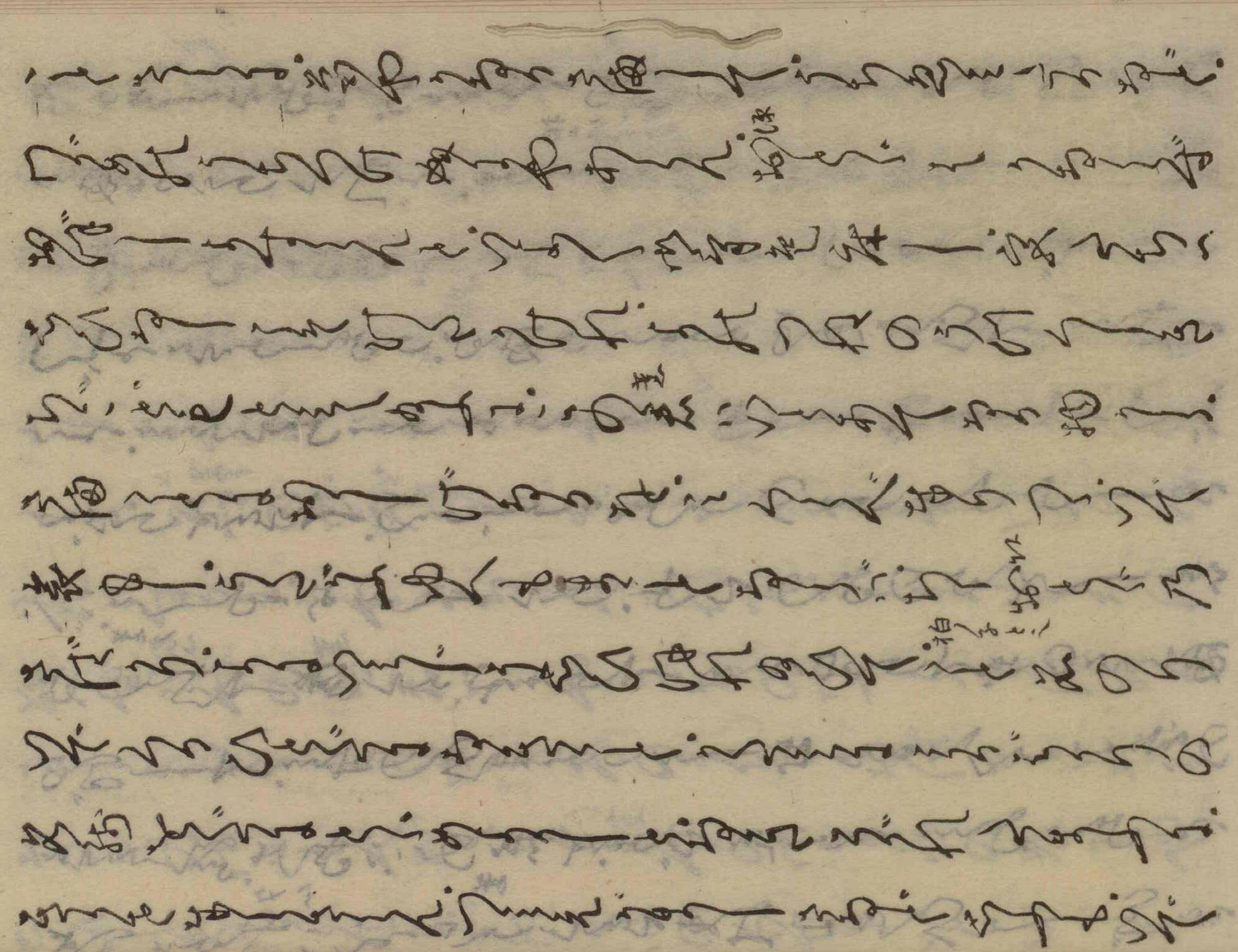
このきこゝなづこてあきむつりあしなひ川
大ね（タム）の君も、養おぼし出るまこのふえのまづこ
りしもあるかれ人のこゝろとゞめて望へまし
ものゝゆくべきこゝまもあらず、女の仇川こへもう
ひあきをやいりぶちひつくん、この世までうずま
ちひいれぬこともかれいまはのとぢめま、一念（ねん）忠
うゝめしきまもましハ衣ともちふまつりれて
こそハおぼきこれ園（やこ）まもまぞふまぎあられかゝれ
ぞこそハ河ぐすまもしうハとゞめじとしふよあれ
おぼおぼしつゞけてをこざま誦經（ずきやう）をきを給、又れ
（拍）ゝよをれちまもをきせ申て、此ふえせバ、ぐぞと人のさう

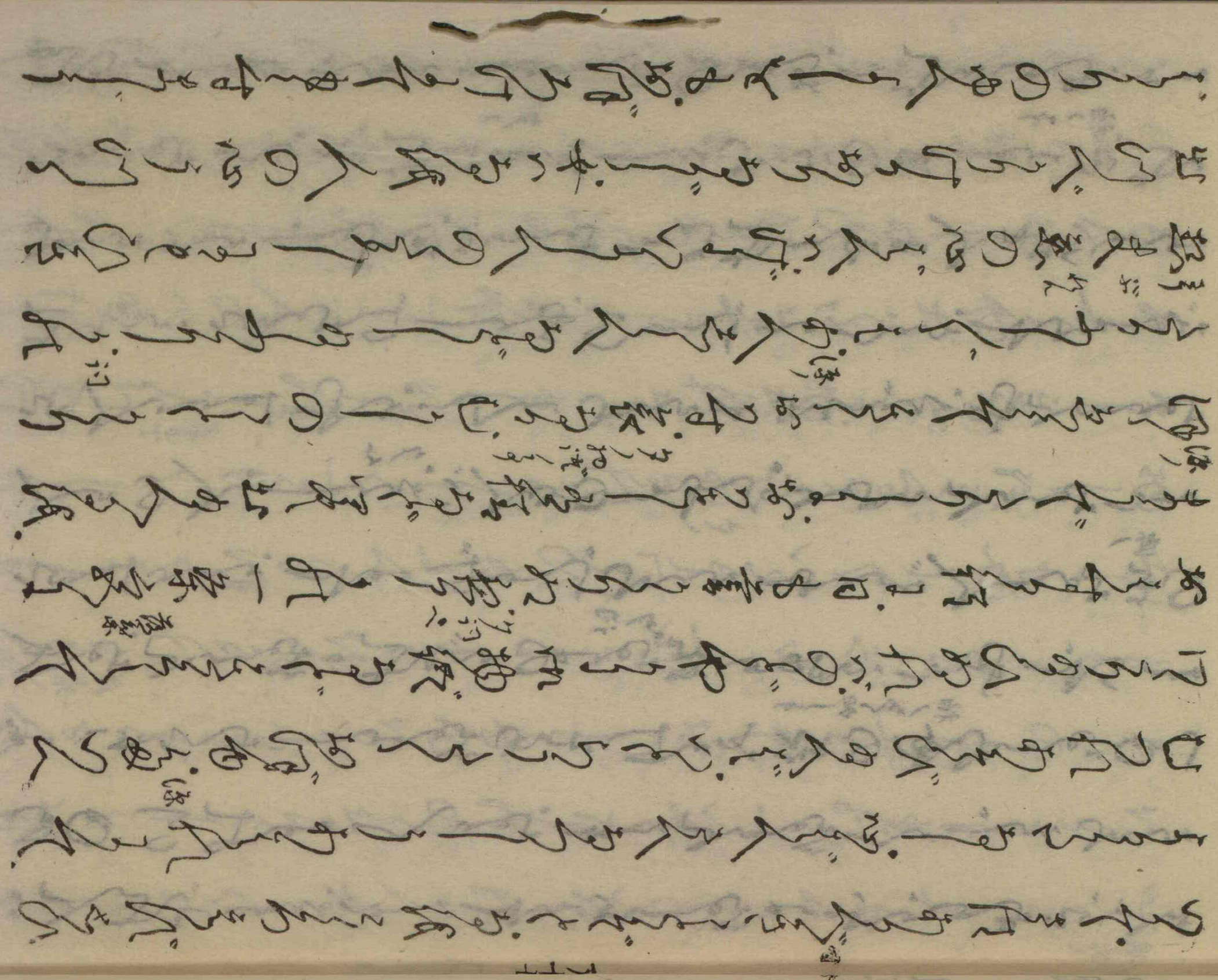
ゆへふうきもれまてひき出なへりしを。こちまちは
仏の為にもひろんも。こうときことくはいひながら
あへなるべしともひて。六条院に来りのひぬ
女（嘗ノ）れのれすにおりしますほどなりけり。三の宮（白ノ文ノ事）三
ぞうりまて。なるこうけくしくおもすりを。こゝなる（恋ノ事）
まぞまるとりつきて。おりしまきを給ひる。まじめて（白ノ）
出ぬて。ちねこそ（詞タ）。こうやいぐきなりて。おなくへ（白ノ様との給ふ）。けて（昭君の法一と云）
おもをし。こづくうしこまりて。いとしどけなげに
のこまへがうちつくひて。おもしまをいりて（詞）（タ）
すれまへをかつりけるへ。いとさやうくなるへ（輕ろかるぐしさん）
とて。いぐきなりて。ねこまへれば。へもこぞ。まろが（白詞）

かぶいくさん。なほ此くとて此(白ノ)袖してさし
かくしたまへば。いと(メん)うけしうてなてなりなふ。
(岩ぬ方ニ)しなるまも二の家の(全ノ仁子ニ)口(恵)ぶとひとつまじつまて
遊び(あそ)ぬ此(ノ)。うけしうてなりますなりなり。
すものまれほどまなりしなりなふを。二家ふつけ
なひて。まつもちね(タ)まいぐれんとのなふを。三(白)の家
あがちね(河タ)をやとてひんなりぬ。院(涼)もかんじて。
いとふぐりがはしきれ有さ海どもかれおほやけの
此ちかきまもり(タノタ)をけくしの経(ずいどん)ほうやうぞんと
おしそひなつま。三家(白)をそいとさがなくおもすれ。
つまこのうそまさをひ口給と。いきめきそしあつ

ひ給ふ。おもひのて二家ハこまちかくこのこゝ心ま
ぐさうかくし給ふれこゝろあらくなんおりしまゐ
めうかれしの給ふらも。おそろしこまでこゝさま
給ふぐるしめふうち思ひてげれども。いとかう
かしとせ給ふしさもこまへり。こゝろしもとうく
しきに公の御座ありおもてまそとそけうら給
りんとするまゝ。こやうちまつわれてぞこゝろもあれ
給りぞ。こやの為。やつこやうちのれつうかはおう
こうどこゝてうしとれこゝろのうちまおぼきどおう
あまそのれ心ざん人をぢうこやのれこゝろの鬼まや。
ちひよを給らんと。これも心のくせまいとおしう

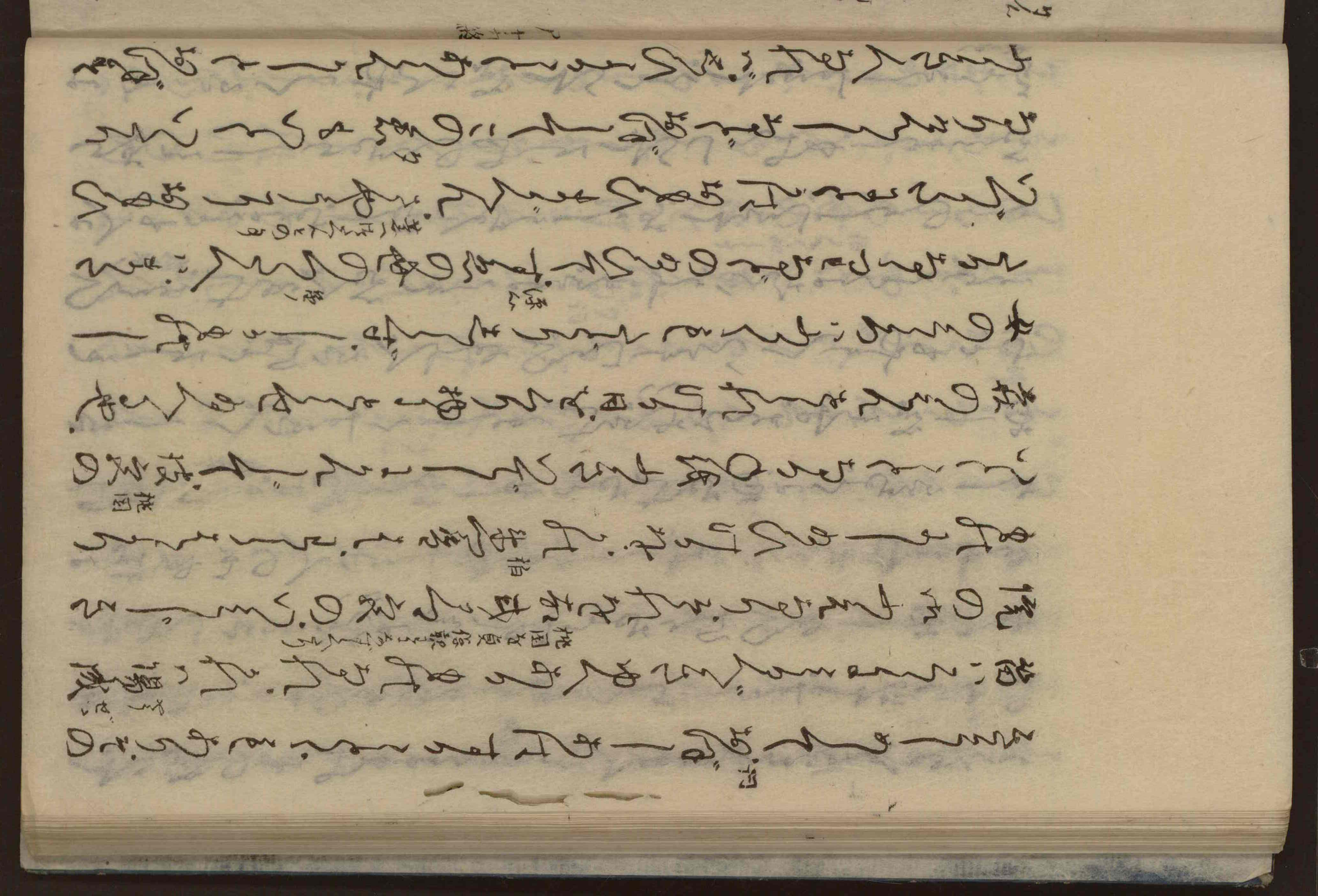
ちひろともいはれとも心の色...
おぼされば、いとゞこのみはみひろしげなく
たゞ露、大ねごとの葉とまでえよくこねかふと
おぼして、うすのひまよりさしいづるまゝ葉の
枝のわれて若くさをさりて、こゝをはなりてまる庵
へだち茎ノしりをかくしくらかくしあはれのおとしき
かゝりとそて、いとゞかしこくひろくらしき
こゝろくるしくよりもこのまゝはおもしげりてつゞ
つゞきこゝかしこありお庵めとゞまる心もとなくのでこれぞ
えやゝかなるねかゞ、これは今すこしつゆかでおも
さ庵ゆかゞりこれど、ましてのうぢめおもしきうは
わかれしさまかゞ、いとゞおほしのへりくちはさはれ
柏ニ似たる



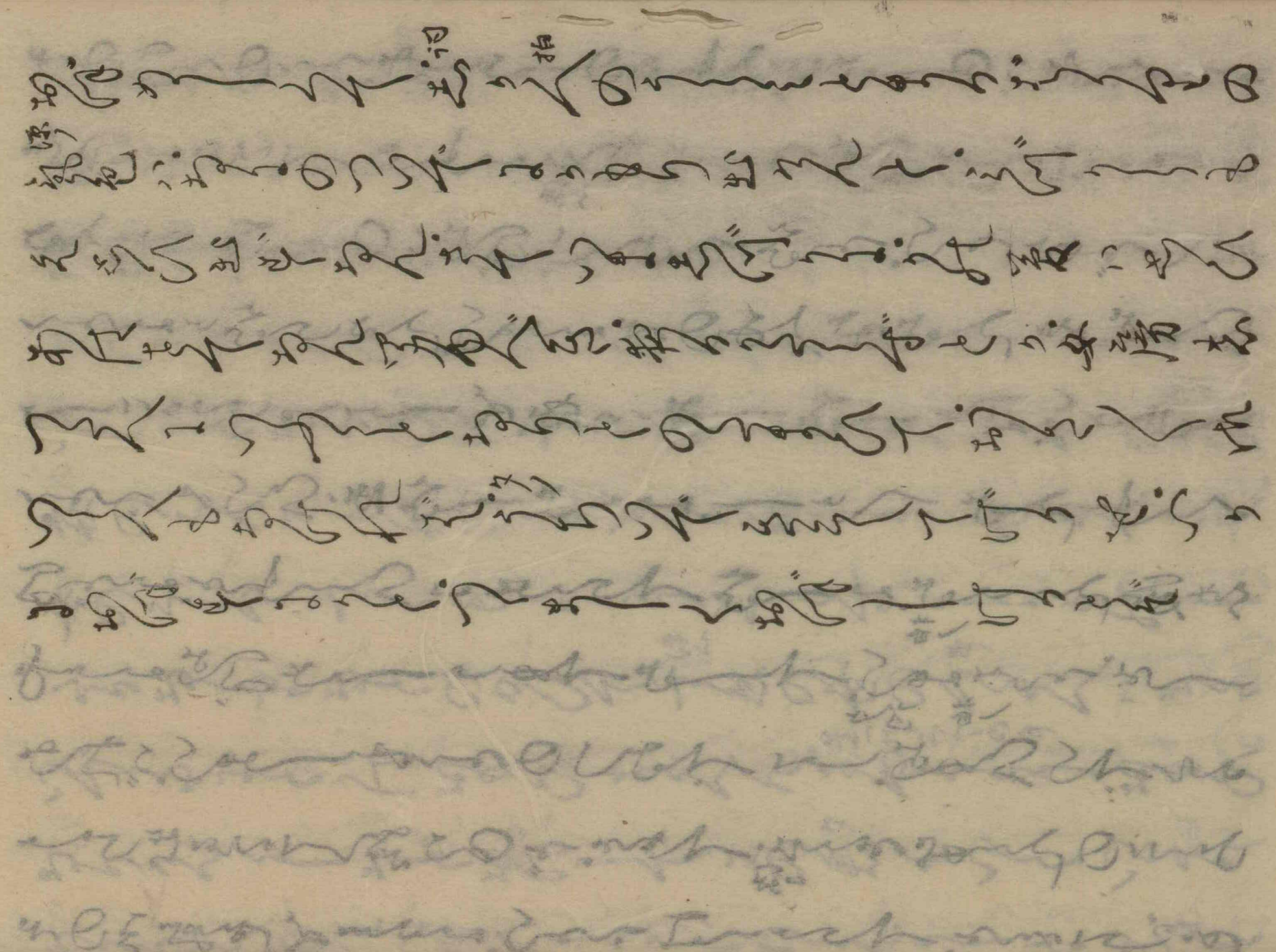


こそありけれとおもひしらるゝことぞもこそおほ
れ色(柏ノ字)にしまのころぞしをますれ(タリ)ぞかくあるがさ
よういを人まもしれぬとおもしがおもすじうはころ
ぞまらてどくうづひゆしげちきこぞれ
なりしんやこぞこめもころまくゝめやすりんべき
ことなりんとなん。しゆとのみんいさ(クん)しん人のうん
のれ(源ノ)をしんぞうをころづけまてかうすき
もいでやとこゝまり給(タ詞)なまのこぞれか給ん。なほ
つゆなしめ世(柏ノ字ヲ如シ)の義をうけそめ給ましあるいま
ころこゝかく給ん。こそおかくよれ川の乃
なんぎありかかは給しめとてこそさうぶれんい

（落葉ノ）心ときしすぐそことゝいで給けんやうくなくとま
御こゝろあしおもひつゝいで給ほのあかりしをおか
かゝるのゝしりつゞきておはしまさん御しおきども今は
よりくとまちてうぶらはずこそ御べあれ。（落葉ノ）おもひ
などもやうくいきつかひなかべきほどりを
御心地もよろず。まかる（夕ノ）おほされずまうしくすさくしき
なしきるぞは。御なれなどもし給しぬは。（落葉ノ）うちとけ
おぼつかなや。たゞなるべしうめやすき人のれ有様は
なん御心のひけるなど思し給は（夕ノ）ずとさつゐで
けふ出て。すくしちく条りかりのひて。されゆゑ
げかりなるゝへまへだし。（源）とくなまれものゝ給いそで



きこしめして、おぼしあはすることゞもあり。その
笛ハこゝまこゝらべきゆへあり。もれなれ、これハ陽成（やうぜい）
院のけ、ゆえなり。これを右式（桃園を貞保親王ゝなづけんとり）宮のいこじき
もれにしぬひけるを、これ柏（柏）悲哀も、おしらせたり
いとことなる。紙ゆきいでしにうんじて、皮宮（桃園）の
荻のえんをこれけり日、どくり抱きとせぬへるや。
女のこゝろハゆくもこゝろ出しぞ。しかもれし
こゝろなるつもなどのなひて、ずゑ（添ん）の世のつゝん（絶ノ）ハまさ
いづるまとうはおもひまぐへん。さやうり（葉へ作さへんとのす）おもひ
なりそんしなどおぼしてこの恵（タ）もいといたり
ゆきへなれバ、そひよりことあんうしとおぼせ



69038
6AP78